

「シラカンバ」の浪漫

青木捨夫

波頭を振り乱し、荒れ狂う真冬の海を眺めていると、寒々として虚に響く泡沫の間から「海は荒海 向うは佐渡よ……」という物悲しい追憶の旋律が口ずさまれてくる。

海程、四季を通じて、摩訶不思議な魅力を持っているものは無い。

「かわながれ」

漁村には古くから「浜廻りは三爻の尊」という俚言がある。海を母として育てあげられてきた村人の中には、さっくり（方言・漁業用綿刺し子の着物）を着込み、かくまき（幅広い襟巻）を頭からすっぽり被って、海岸の流れ物を漁りながら散策する風習をさす俚言である。

特に、冬の大時化の後の朝は流れ物が多く、色々な「物」が打ちあげられている。
流れ藻の多くは「ホンダワラ」でその藻をひっくり返して見ると、美しい紋様の「カワハギ」（方言めんぼ・ばくちこき・こおもり・でんしょお・カワハギ科食用=刺身・煮付・味噌汁が非常に美味）がびんびん跳ねながら躍り出て来たり、足の踏み場も無い程「ハリセンボン」（「フグ」に似ているが「フグ」=マフグ科ではなくハリセンボン科、熱帶性・食用になるが、全く食用化されていない。犬も食わなければ肥料にも越前海岸ではされていない）が、白い腹を見せて散らばっている。大小さまざまな「しゃがだま」（方言・ガラス製球形の漁業用浮子）や木材や板屑、それに難破船・廃船の古材もあれば、家庭用品の箸・椀から茶箪笥までというパライティである。近年は発泡スチロールの屑が「波の花」のように海岸を埋めて散乱し、プラスチックの空瓶が醜く骸を曝す姿は、浜廻りの情緒を失わせるばかりか、海は死んだ、浜は滅んだとあわれを催す惨状である。

そんな中に、色褪せた護符を見つけることもある。遭難の憂き目に際し、波濤に翻弄されながら、両手を合わせて水天宮や金比羅宮の神々に生命の安全を念じ、舟神の護符を流して、酒断ち・茶断ち・塩断ちを約し、願をかけたと思われるその護符に鬼気を感じ、胸が締めつけられ、目頭が熱くなってくる。

こうした「海からの流れ寄る物」を総称して、「かわながれ」と呼んでいる。

「かわながれ」は一般に所有者不明のがらくたが多い。しかし、直径40cm長さ7m以上もの木材もある。それを海から引き揚げたり、打ちあげられたものを発見し、それに最初にロープをかけたり、何か目印をつけておくと、その木材はその人の所有物になって、後から行った人はもう手が出せないという「不文律」がある。-----弥生・縄文の土器破片でも、拾得者が警察へ届け出、6ヶ月経って拾得者のものとなり、落し主が現れれば、その価格の5分から2割の報労金が出る-----木材運搬船が沈没した時は警察から届出よという達しも時にはあるが-----。

木片や製材出来ないような材木は、1ヶ所に集めておくとその人の私有物となってしまい、そ

れを抜き取ってくれば、泥棒となるからこれ又不思議な撻である。

この固い約束事「不文律」はいつ頃から始まったのか、流れ物に付着している「エボシガイ」だけが知っている。年代不詳の習俗であろう。

小さな木片などは、何日も雨曝しにして塩氣を抜き、よく乾かして風呂の薪にする。炊事用のかまど竈で燃やすことはしなかった。その木片が「かわながれ」になる前、どこに使われていたか分らないからである。もし不淨な場所にでも使用されていたら、竈神（かまどのかみ）に対し不敬になるという、信仰心深い漁民根性の現れであり、幾日も雨曝しにして塩氣を抜くのは、風呂釜（据風呂方言・スイフロ）が塩分で早く傷むという生活の知恵からである。

海は永遠に生命を養い、漁民を育んできた。或る時は、優雅な抱擁で人々を愛し、或る時は、過酷な試練で突き離し、誅罰をも加えた。矮小な人間の持つ喜怒哀樂は既に、神に見すかされているものである。

海に対しての挑戦も駆け引きも思い上がりも許されない中に、神の存在を認識し畏敬の心を持った。

天津神（天の神・天孫）は空からばかりではなく、海（綿津見）からも御出にななく信じていた。その天津神は、海からの「流れ物」に憑依されていると信じていた。奇瑞（夢のおつけなど）に導かれて海岸へ行き、「流れ物」に神形を見つけ出した時、「物」は「神」として氏神様に奉納したり、1社を建立して奉ることもあった。北陸の漁民に多く見られる「寄り神信仰」である。その代表的な神が、蛭子の神（伊諾那岐・伊諾那冉二柱の第1子 漁業の神恵比須ともいう）であろう。

「かわながれ」は海岸でさえあれば、どこの浜へでも打ちあげられていると考えられがちであるが、磯波の寄せて来る方向、沿岸流、風向、波浪状況、海岸の地質・地形が原因してか、多く集積する場所は定まっている。しかも1年中その集積場所が固定しているということは、何が一番の原因だろうか-----。「波の花」の立つ場所・海苔の付く場所・若和布の寄る場所「かわながれ」の打ち上げられる場所と、それぞれの縄張りがあるかのように見えて面白い。

「シラカンバの表皮」

「かわながれ」の中に「シラカンバの表皮」を見つけることが多い。昆布巻状に3～4回渦巻いた表皮は、直径約4cm、長さ約14cmと一定している。冬の大時化でないと余り漂着しないことは「カワハギ」や「ハリセンボン」と時期的に一致する。ここに1つの疑問点が出てくる。

南方系の「ハリセンボン」や美しい紋様の「カワハギ」に混って、なぜ北方系の「シラカンバ」の表皮が漂着するのか。

『昭和25年頃までは、毎年冬になると沢山な「シラカバ」の皮が寄ったんです。「がんびの皮」とか「だんべの皮」（何れも越前町道口方言）とか言って、皆が浜へ拾いに行ったんです。油気が多いもんですから、マッチ1本で火がつき、よく燃えるんで、たきつけにもってこいでした。物資の無い時でしたんで-----。』終戦（昭20）後、アメリカ製とかソ連製と言われた棒状（直径5mm、長さ30cmばかり）や帶状（幅2cm、厚さ2mm、長さ30cmばかり）の火薬が箱

詰のまま打ちあげられた。皆はそれを分けあって、線香花火のように燃して遊んだり、たきつけに使った。手榴弾を拾い分解して指を失った者、一命を落した者もいれば、菓子の箱詰も拾った。これらはすべて「かわながれ」として適当に処分された。

「シラカンバ」の皮や木片が拾い集められなくなったのは、戦後の物資不足から脱出し、新生生活運動とか台所改善とかが進み、家庭燃料も薪に変って石油・電気・プロパンガスが普及したからである。屋根裏の煙出し窓も煙突も無くなり換気扇が取り付けられた。

「心ここに有らざれば、見るとも見えず」と言うが、事実「シラカンバ」の表皮は流れ着がなくなっている。此処にも疑問が残る。

縄漁業（釣漁業）の中心は「イカの1本釣」と「スケトウ鰯の延縄」であった。ところが昭和33年頃から、ぱったりとスケトウ鰯が釣れなくなった。人々は「ソ連がシベリヤと^{たきぎ}樺太（サハリン）の間の^{まろやかさきよう}間宮海峡を埋めて陸続きにした。その為、冷たい流れ（リマン寒流）が日本海へ来なくなった。-----スケトウ鰯が居ないのは此の為だ」と結論づける程の異変であり、スケトウ鰯の延縄漁業は姿を消した。

冬が冬らしくない意から、「暖冬異変」という熟語を創って驚いたが、それが続くうちにその熟語さえ忘れ去る体質となってしまった。

自然是、人智を超えた中に蠢めいているのだろうか。

1月の或る日、近年顛に見かけなくなったシラカンバの表皮数枚と長さ30cmばかりの丸太を1本海岸で拾った。丸太には、太い釘が1本打ち込まれ、途中で折り曲げられていた。丸太を拾ったのは、生れて始めてである。

それだけに色々と推理し、想い巡らせて見た。「名も知らぬ——から流れ寄す——故郷の岸を離れて-----」と名詞「椰子の実」をもじっと見た所で、人様にも恥しい忘想の詩となるので、免許科目「理科」という正調派で考えることにした。

発想の転換・展開に必要なので、基本事項から累々と記す。

◎「シラカンバ」白樺 双子葉植物・カバノキ科の落葉高木。木州（中部以北）および北海道の深山の陽地に自生する。一名シラカバ 樹皮は白色で、横にうすく紙状にはげる。葉は互生し、裏面は-----略 材は皮つきのまま趣味の建築・あずま屋・山小屋などの建物材料や、家具・細工物・たきぎ・パルプなどに用いられ、また樹皮をはがして細工物に使う。（原色現代新百科事典一学研）-----略-----白樺油=シラカンバの皮を蒸溜してとった油。褐色で、冷却すれば結晶を析出して混濁する。一種の芳香を有し、化粧品の製造に用いる。樺皮油（広辞苑=岩波書店）

◎対馬暖流 奄美大島西方の大陸棚近くで黒潮から分かれて対馬海峡を通って日本海へ流入する暖流で-----略-----対馬海峡西側で対馬暖流分岐（東鮮暖流）は朝鮮東岸沖を北東上し、日本海を東へ横断して津軽海峡西口に向かう日本海北部にリマン海流、沿海州寒流・北鮮寒流・日本海中央寒流があって、南より南西さらに西に下り、暖流との間に潮境を形成する-----略-----一般に日本近海内湾には左旋反時計回り環流の多いのは、地球自転偏向力による（豊後水道・紀伊水道・伊勢湾・駿河湾・相模湾・東京湾・噴火湾など）ただし、日本海側の若狭湾では時計廻りの右旋環流をなし、五島灘・天草灘・富山湾・石狩湾などにこの傾向のあるのは、沖合いを強

く北上する対馬暖流で地形的に誘起された関係である。（水産ハンドブック 東洋経済新報社）

◎潮流 潮汐にともなって起こされる海水の周期的移動を潮流という。したがって通常1日2回の高低潮によって潮流も1日2回上げ潮・下げ潮となって現われ、前者を漲潮流、後者を落潮流と呼び、流れの停止しているときを憩流と称している。-----略（水産ハンドブック）

沿岸流 海岸に沿って水の表面を流れる潮流、磯波のために生ずる。（広辞苑）

対馬暖流が北上しているということは、疑うべきもない常識として衆知の事であるが、疑いたくなる節もある。それは地表の現象と異

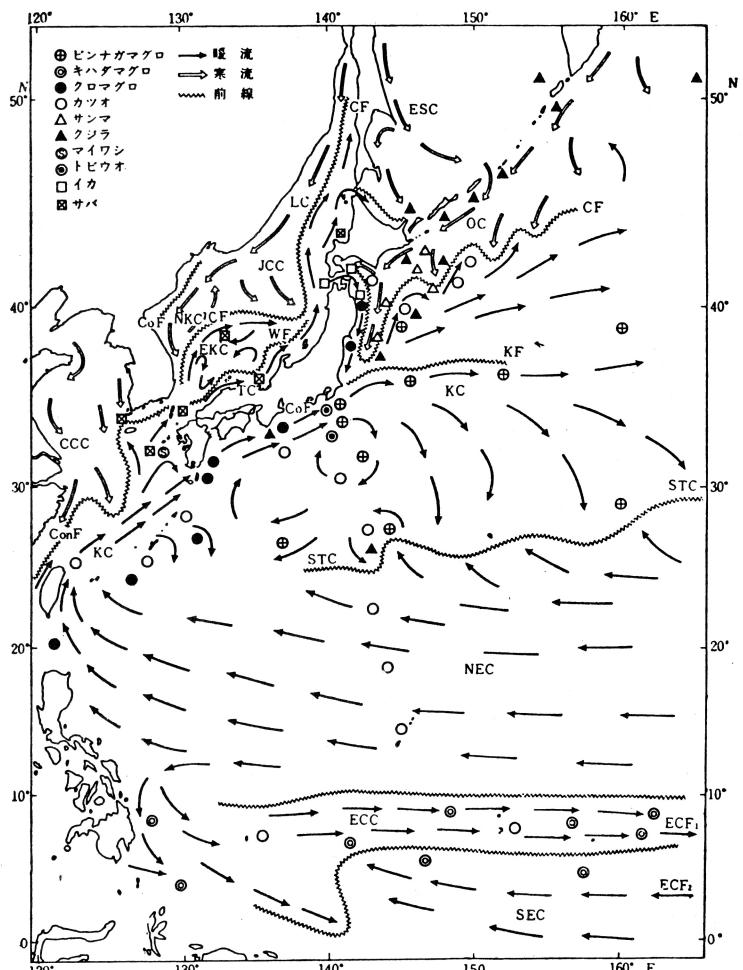
なり、深淵であり複雑であり、水産王国日本の水産学会でも、まだまだ「未知への世界」は余りに大きすぎるからである。卑近な例として、日本海沿岸の海流は北上している。

◎昭和42年 福井市国見中学校科学クラブが、月平均25本の海流瓶（サイダー瓶代用）を鮎川町大崎海岸より1ヶ年間流して実験した結果、夏季は遠く秋田県へ達し、冬季は殆ど三国町波松海岸へ漂着した。此の300本の海流瓶のうち唯1本も、鮎川以南の海岸での漂着は無かった。

◎同昭和42年 韓国釜山の（水産庁？）ポリエチレン製海流瓶が福井市鮎川海岸へ漂着し同國へ返信

◎昭和13年12月12日 旧海軍「関東艦」南條郡糖海岸で遭難。清水末吉少尉の遺体 越

I.5 日本近海海流図(海流・前線略号名)



(注) LC..リマン海流 NKC..北朝鮮海流 JCC..日本海中央寒冷 JKC..東朝鮮海流 TC..対馬暖流 CCC..大陸沿岸海流 ConF..大陸前線 CF..日本海寒冷前線 WF..日本海温暖前線 KC..黒潮 OC..親潮 ESC..東樺太海流 OF..親潮前線 KF..黒潮前線 STC..亜熱帯収容線 NEC..北赤道海流 ECF₁..ECF₂..赤道反流前線 SEC..南赤道海流 ECC..赤道反流 C_oF..沿岸前線

（水産ハンドブックより引用）

前岬沖合で越廻村茱崎漁船の鯛延縄にかかる。

◎昭和24年秋 京都府丹後浅茂川の漁船（転馬船）越廻村居倉へ漂着漁師死亡。

◎江戸時代 越廻村居倉海岸に出雲系の神形多数漂着 75体様とあがめ、同春日神社に奉納。

同時代越廻村大味海岸に同神形1体漂着春日神社を境内社として設ける（年号は異なる）

◎出雲地方と伝説・方言が共通している。鶏の肉をつのじ（鱈）縄の餌として海難事故発生。鱈・鮫をワニ（出雲）ワン（越前）飛魚をアゴ（隱岐・越前共通）という中でその原形が出雲である。その他校挙に暇がない程に多い。

日本海沿岸の海流は南下している。

◎昭和36年頃、第8管区保安庁（新潟県）が新潟沖で流した海流瓶のうち、1本を福井市大丹生海岸で拾得、返信し、礼としてタオルをもらう。

◎昭和某年 美山町の某女足羽川に転落。遺体、大丹生海岸に漂着。

◎昭和某年 鮎川町の某女 同海岸より海へ転落。遺体、小浜市海岸へ漂着。

北上・南下がきめかねる。

◎潮汐によって起きる「^{のぼり}上り潮」「^{さが}下り潮」のあることは周知の事であるが、北風で舟は南へ流れつつも潮流は北上していることもあり、上層の海水は北上し、下層の海水は南下しているという現象がある。

結論としては、対馬海流を「海上の道」として、大陸からの文化が、北九州に上陸を目的としたながら、出雲国（島根県）或は因伯（鳥取県）若狭（福井県）越中（富山県）へ上陸し、京都や高山へ結ばれたという歴史的事実は、対馬海流北上の結果である。

太平洋沿岸を流れる黒潮に乗って、明治31年の夏、椰子の実が愛知県伊良湖岬恋路ヶ浜に漂着し、柳田国男がこれを拾い東京に持ち帰った。そして親友の島崎藤村に見せた所「椰子の実」の詩が生れたという。昭和27年10月 柳田国男の「海上の道」で明らかにされたといわれる。

漂着した「シラカンバ」の表皮は語りかける。

① 表皮は幅約15cmに刃物で縦に切り、そして直径約10cmのシラカンバの木の皮をはぎ取ったと考えられる。杉の皮をはいで木質部だけを丸太として使うような用途があるのだろうか。それとも「ガンビのタワ」という、此の表皮を乾溜し香料をとる為の作業結果だろうか。マッチ1本でたやすく火がつき、樹脂が多く黒煙をあげ、はじけるように燃える状態から見て、香油を取った残皮とは考えられない。

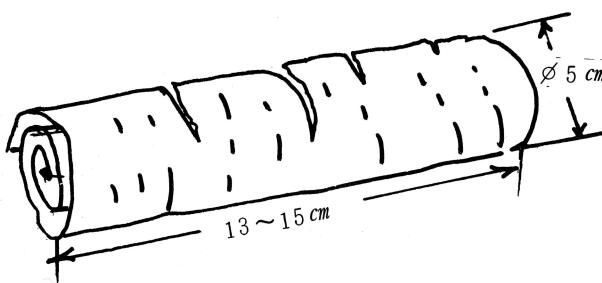


図1 シラカンバの表皮

② ロープに巻きつけられた表皮

表皮は、表を内側になるように 5 回程に渦巻状に巻きつく性質がある。1 本のロープにこれを通し、2 個毎にもう一本の副えられたロープにくくりつけられている。この状態は刺網の浮子に似た形状である。少なくとも日本では、この表皮を漁業用網の浮子に用いることは無い。とすれば、日本以外の国としてソ連か韓国が考えられる。表皮の浮力から考えると、底刺網が妥当では無かろうか。

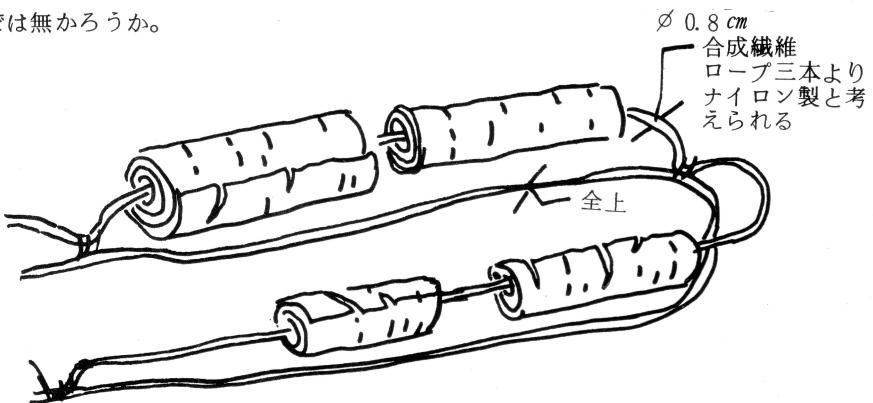


図 2 浮子と考えられる

③ シラカンバのころ

昭和 54 年 ⑧

1月 27 日

越前町厨 城
崎北小学校下
の海岸で、直
径 10.5cm、長
さ 30.5cm のシ
ラカンバのこ
ろ丸太 1 本拾
得した。この
ようなころの

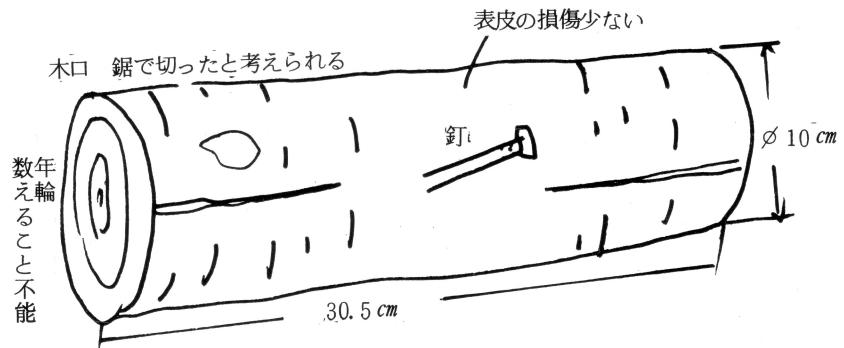


図 3 シラカンバのころ

拾得は生れて始めての経験である。重量 2.64kg、体積 2,820 cm³、比重 0.936 と算出された。隔日に重量を測り比重を求めたが、3 月 14 日室内乾燥（暖房）46 日後の比重は 0.624 となり、4 月 20 日 83 日後の比重は 0.521 となった。乾燥によって失われて行く水分は、略ぼ日数に比例している。

この乾燥木材を再び海水に浸漬する事により、比重 0.936 までの日数を逆算すれば、この丸太が何日間、日本海を漂流していたかを知ることができよう。但し、シラカンバの原木としての比重、更に伐載してから日本海へ流失するまでの日数が基礎とはなるが-----。

この丸太に 1 本の釘が打ち込まれ、3 cm 程の露出部は表皮に強く折り曲げられている。この

釘の形状から、日本 ⑥

製の釘ではなく、その製法が誠に原始的な粗雑さがある。

越前町道口 天野喜代一氏（製材・建築業）は、ソ連より日本へ木材を運搬する時、筏にもしたが流失が多く、船積にする事が多くなってきました。木材をくくる時、このような丸太をはめこんだ。北洋材は一般に力がない

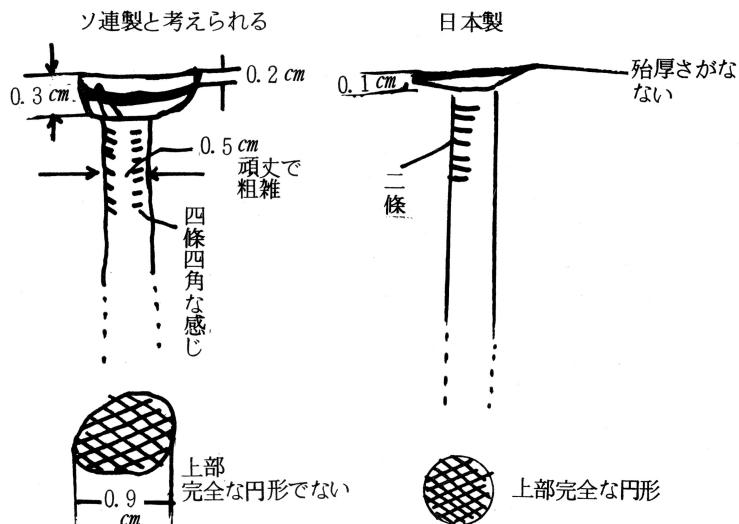
ので、下地材に用い建築の構造材としては不向きである。又ワイヤを巻く時、ずらない為の釘という。

此う説明されると、敦賀港か何れかの日本海側の港で解体され、不要になった此の丸太が、北上と考えられる対馬暖流によって、当海岸に漂着したのか-----。少し夢を大きくすると朝鮮、更にシベリヤ沿海州あたりのシラカンバの丸太が、風雪波浪に弄遊ばされて-----。もっと海のロマンスを広げると、日本の本州の山岳から川を下り、そして海流に乗ったとも、北海道の山岳から川を下り対馬暖流に乗って樺太サハリンを旅したとも考えられる。サハリンには日本海寒流前線がある。ここからシベリア側のリマン海流（寒流）にのり、南下して北朝鮮海流（寒流）となり、そこで、東朝鮮海流（暖流）に合流して進行方向を変えたシラカンバは対馬海流（暖流）の本流に乗って越前海岸へ漂着した。寒流の発達する冬期にその漂着の多い理由を説明し推論すると、1片の表皮・丸太が何と苦難と海に生きるたくましさを物語ってくれることか-----。平均水深1,350M、面積約100万M²の日本海を一巡する小さなシラカンバ、もし藤村の詩才が自分にあるなら「シラカンバの柔肌」とでも題して、冬の日本海を表現しただろうに、と残念である。

④ シラカンバの木材

昭和54年3月末、越廻村浜北山海岸に長さ約8m、木元直径20cm、表皮の60%残っているシラカンバの材木1本漂着。此の他越前海岸に十数本の流木が打ち上げられていたが、何れも表皮が無く白木の材木である。敦賀その他で、此のようなシラカンバの木材を輸入しているかどうか再調査する事も必要であろう。唯、パルプ材としての利用しか、シラカンバの木の用途が無いとしたら、此れらの流木はどこから来たのか-----。

1片の表皮、1本の流木にも、私達の夢をかき立てる何かがあり、そこから、遙なロマンが広



がって行く「心ここにあらざれば 見るとも見えず」とうそぶくより、海とは、こんなに悠久の過去・現在・未来へと果しなく続き、時の流れを秘めて私達の心に、安らぎを与えてくれるものである。

(城崎北小学校長)